# 目次

第一章　疑惑……2

第二章　新たな始まり……9

第三章　移住という地獄…… 25

第四章　生きてる実感と私の変化…… 40

第五章　必要な停滞・壮絶な空回り…… 51

第六章　奈津子覚醒！価値観の崩壊…… 66

第七章　ポテンシャルを信じる力…… 69

第八章　大逆転…… 75

第九章　未来へ…… 82

あとがき…… 90

# 第一章　疑惑

「もしかして・・・浮気？」
ある日、ピンときた女の勘。
これが私の思ってもみなかった冒険の合図でした。

私、藤井奈津子は東京のアパレルメーカーに勤めていて、主人は富山県に単身赴任中の週末婚。幼い娘を働きながら私ひとりで育てていました。

勤めていた会社は、福利厚生がしっかりしていて、女性社員の産休・育休の取得率はほぼ１００％。就活時から、女性に優しい会社として説明があったこともあり、私も先輩たちのように当たり前に出産をする際は休みを取ったり、定年まで働くものだと思って入社しました。
会社には、私の家庭の事情を伝えていて、時短勤務や子どもの病気による休みなど、チームの方にフォローしてもらって、本当に助けてもらっていたんです。

しかし､2 人目の出産の時からなんだか雰囲気が変わってきます。復職にあたっての面談で、元いた部署に私の席がないという話を聞くんです。

**私**　「あの・・・私の席は？」

**上司**　「急で悪いけど。旦那さん単身赴任は、まだしばらく帰ってこないんだろ？お子さんを一人で育てるのは大変だろうから、営業より時間に融通が利く事務にならないか？」

**私**　「あ、はい・・・」

4月に復職すると、私の席には4月入社のかわいい新入社員が座っていました。
〝彼女が悪いわけじゃないから、話しかけるなよ〟上司に念押しされる始末。

**私**　「・・・(いいけど、いいけどさ。これまでやってきた私を使うより、1から育てる新入社員の方が使いやすいってことでしょ。まぁ、そうだよね。会社のためだし、仕方がない。別に話したっていじめたりしませんよ！)」

この人事で誰かが不幸になるものではないし、私だってそれがいいのだと、頭ではわかっている。
ただ、この選ばれないという虚しさが、ずっとぬぐえなかったんです。

**〝私はあの子より価値がない〟**
**〝会社の役に立たないお荷物のような存在〟**
**〝みんなが私を可哀そうという目で見てる気がする〟**

これまで入社からずっと自分なりに頑張ってきたつもりです。
同期の中で私だけが取り柄も学力もなかったからこそ、何とか認められたいと思って、真面目に与えられた仕事をしてきた。

**私**　「でも、子どもができたらこんな扱い？頑張るっていったい何なんだろう。」

家では毎朝、代わる代わる大暴れしている１才３才の娘たち。
東京の下町、マンションの下の階に住む気のいいおばちゃんの管理人さんに
〝今日はどっちが大変？子どもは泣くものだからうるさくしたっていいからね〟
と優しい声をかけてもらうだけで、朝から私が号泣するくらい、私はいつも気を張って、時間に追われて、誰かに恐縮して緊張して、何もうまくいかない。

娘たちを電動自転車の前と後ろに載せて、ダッシュで保育園に送り、保育園では誰とも会話を交わす時間も心の余裕もなく、ダッシュで会社に向かう。
地下鉄に飛び乗って、ようやく一息ついて

**私**　「・・・よかった。これで今日も一日が始まる」

夜は夜で、大暴れの子ども達にご飯を食べさせて、お風呂に入れて、ケンカしたりぐずったりして泣く娘たちに〝泣きたいのはこっちだよ！〟とイライラしながらも、全ての手を止めて、泣き止むまで抱きしめて、なんとか寝かしつける。
疲れ切った私も一緒に寝落ちしては、次の朝、また散らかしっぱなしの部屋からスタートする繰り返し。とにかく、やるべきことさえ満足にできない日々。

**私**　「子どもなんて嫌い。ムリ。子育てなんて私にはできない！なんで私が１人で育てないといけないの？」

会社で孤独を感じはじめていた私は自分に自信もなく、ゆっく

リ鏡を見ることも、スキンケアをする余裕もなく、それまで〝頑張っていれば認められる！〟と思っていたけど、今では私の信じていた未来も、自尊心も、ここではないどこかに行ってしまったみたい。

そんな今の生活に限界を感じ始めた週末、いつものように主人が富山から東京の家に帰ってきました。

**私**　「んー？何かちがう・・・」

いつもなら主人も私と同じように、日々の仕事や移動で疲れている様子なのに、今日は雰囲気が違う。なんかキラキラしてる。
鏡の前にいる時間が長い。
いつも着ないピンクのシャツを着ている。
普段も休みでも仕事の電話をしてるけど、この笑わない男が今日は楽しそうに話している。この電話から漏れてくる声、どうやら相手は女性っぽい。

**私**　「もしかして・・・浮気？」

以前だったらこの場で問い詰めていたかもしれない。
でも、その時の私にはそんな気力もなくて

**私**　「・・・（あぁ、終わった。私は捨てられるんだな。）」

仕事にも家庭にも絶望を感じ、笑顔で電話を切った主人に

**私**　「ねぇ、せめて私より若くてかわいい子にしてくださいね」

と、せめて消えかけている私の自尊心が傷つかない相手でいてほしい、という願いを込めて小さな抵抗をしてみる。すると

**主人**　「はぁ？なにが？」

**私**　「どうせさ、私は価値がなくて、会社にもあなたにも捨てられるの。でもね、慰謝料はあなたからも相手からもきっちり頂きますから！」

**主人**　「ちょ、ちょっと待ってよ。なに相手とか、慰謝料とか」

**私**　「え、だって富山で浮気してんでしょ？」

**主人**　「してないよ！」

**私**　「じゃ誰、今の電話。そんなニコニコしながら女と電話して、今日だって鏡ばっかり見てなんか色気づいてるし、私が買っていくら勧めても着なかったピンクのシャツ着てるじゃん！
そういえば、最近仕事って言って、朝早かったり遅かったりしてるけど、本当に仕事してるの？私には電話してこないのに、なんで他の女と電話してんのよ。
私はこんなに苦しいのに、なんで急にそんなカッコよくなってんの！好きな人いるんでしょ！！」

**主人**　「ははは！相変わらずすごい破壊力だな。
楽しそうになんて話してた？
言ってなかったけど、今ビジネスセミナー受けてて、

その中で勧められたパーソナルカラー診断ってやつを受けたんだ。似合う色にピンクがあったから着てみたんだよ。ピンク嫌いだったけど、着てみると悪くないね。」

**私**「ビジネスセミナー？パーソナルカラー診断？」

**主人**「うん、君も受けてみたら？」

**私**「え？どっちを？私がダメだから？」

**主人**「そういうわけじゃないよ。どっちでもいいけど、僕がいいと思ったから、君にもいいかなと思ってね」

**私**「本当に浮気じゃないのね？私のこと捨てない？」

**主人**「何、捨てるって。捨てられたいの？」

**私**「やだー！捨てないでー！！じゃ電話の女は何よ。笑ってたじゃん」

**主人**「電話の人は一緒にセミナー受けてる仲間で、最近僕の仕事がうまくいってるから、つい報告するのが嬉しくなっちゃってね。」

**私**「何その報告って。その人にしないといけないことなの？そんなに嬉しいなら私に話したらいいじゃない」

**主人**「それもそうだなぁ」

**私**　「もう誰にも相手にされないから、あなたに捨てられたら生きていけないよ・・・」

**主人**　「どうしたの、急に興奮しちゃって。まぁでも、捨てられたくないみたいなの、あんまり好きじゃない。自立しなよ。」

**私**　「自立ってなによ・・・私だって、昔は調子よかったんだから。」

**主人**　「じゃもう一回いい調子に戻ってさ」

**私**　「うるさい！でも・・・セミナーはよくわかんないけど、パーソナルカラー診断は昔から興味あったの。紹介して。」



おしゃれとは無縁の子育て生活



子育てに疲れ果て心が病んでいた私

# 第二章　新たな始まり

次の休みに、パーソナルカラー診断を受けに行って、私に似合う色とスタイルを教えてもらったんです。

**私**　「私ってこんな色が似合うの〜♡いつぶりだろ〜私、こんなに優しい顔してる〜」

しかし驚くことに私の後に、なんと主人の電話の女性が診断の予定で、私を待っているらしい。**直接対決。緊張の瞬間・・・**

**金子**　「わぁ！藤井さんの奥さんですよね？」

**私**　「あ、はい・・・(なんだよ、せっかく診断楽しかったのに)」

**金子**　「金子と申します。旦那さんにはいつもお世話になっています。この時間に奥さんが来ているって聞いたので、お会いしたくて早く来て待ってたんです。いつも奥さんの話を聞いていたので、お会いできてうれしいです」

**私**　「主人がお世話になっています・・・(いつもって、どんな話聞いてるわけ？)」

**金子**　「奥さん、カラー診断どうでしたか？私これからなんです」

**私**　「あぁ、新しい自分を発見したっていうか、本当に楽しかったです！（ん〜私より年上な感じだけど、この人もやけにキラキラしてるな)」

**金子**　「奥さんもセミナー受けるの？」

**私**　「いや、私はそういうのよくわからないんで・・・（いや、受けないでしょ。社長ばっかって言ってたし）」

**金子**　「そうなの？私は子育てもう落ち着いたけど、子どもが小さい時にこういうセミナー受けてたら**子育て楽しめた**って思うんだよね。」

**私**　「子育てが？楽しい？・・・どうしてビジネスセミナーが？」

主人のように**仕事でのやりがいを見つけて、キラキラしたい！**
今の自分をなんとか**変えたい！**
怪獣のような娘たちを**少しでも可愛いと思いたい！**

**私**　「私・・・それ・・・受けます！」



パーソナルカラーを身につけた時の印象の違い

## ◆高額ビジネスセミナーでの学び

金子さんの〝**子育てが楽しくなる**〟という言葉で、ビジネスセミナーが何をするところかわからないまま、受講を決めた私。

**私**　「主人がキラキラしててカッコよくなっちゃったのに、私が何もしなかったら置いていかれるかもしれない。
私だって、人生こんなもんじゃない！！」

セミナーを受けると決めてから私は、とにかく今の自分を変えようと必死。
ただ、会社の社長や経営者の方たちが集まるビジネスセミナーに、仕事に対する目標が一切ない〝**ただの浮気されたくない主婦**〟な、藤井さんちの奥さんという肩書の私が一人混じっちゃって。

私自身、その場所がソワソワして落ち着かないし、内容は難しくて全然わからない。
講師の顔は怖いし、はじめからなんか相手にされてない感じがする・・・

**私**　「でも何も変わらないままでは帰れない。私だって、
人生変えるために、高いお金と時間を使ってきているんだから、このまま帰れるか―！！」

気合を入れた私は、前のめりで受講していると、女性受講者みんなが憧れる女性講師から、次々にこんなことを言われます。

**講師**　「藤井さん、うるさいわね。空気読めないの？」

**私**　「え？あ、すみません・・・」

**講師**　「感情をコントロールしなさい。あなたは迷惑です！」

**私**　「すみません・・・」

**講師**　「私はあなたのことはわかりません。多分、時間の無駄だと思いますけど、あなたが話したいと言うなら話しましょう」

**私**　「時間の無駄ですか？（みんなには何でも相談のるって言ってたのに、みんなと私に対する顔が違い過ぎじゃない？）」

**講師**　「あなた家族を愛していないのね。お子さんが可哀そう」

**私**　「・・・はぁ（どうして子どもがいない人に私の子どもが可哀そうだなんて言われないといけないの？
私は頑張って今を変えたいだけなのに、どうしてケチつけてくるの？私ってそんなにダメな人間なの？）」

セミナーの帰り道、私は歩きながら涙が止まらず、自問自答を繰り返しました。

**私**　「私はなんてダメなんだろう。ダメな奴だからみんなより怒られるん。ちゃんとしないと。でも・・・もうやだよ」

はじめは私が悪いんだと思って、女性講師に言われたこと全てを聞こう！直そう！と思っていたけど、否定されることが続くことで女性講師に対して苦手意識が出てきて、思い出すだけで

気持ちが下がるようになっていました。ここから逃げたい…

ただ、女性講師とのモヤモヤとは別で、ここで共に学ぶメンバーからのポジティブな刺激は存分に受け、次第にこう思うようになっていったんです。

**私**　「私、もっと強くなりたい。もっと輝きたい。藤井さんちの奥さんじゃなくって、誰々ちゃんのママじゃなくって、**藤井奈津子として生きたい！私には何ができるんだ？**」

問い続けて１ヶ月たったころ、ふっと頭によぎったんです。

**私**　「**パーソナルカラー診断を受けた時の感動をたくさんの人に伝えたい！**」

この想いを女性講師に伝えると、

**講師**　「あなたにそんなセンスあるの？無理だろうけど、まぁ頑張ってみたらいいんじゃない」

**私**　「はぁ・・・はい。（最後まで嫌な感じ。あなただって昔はダサかったくせに！私はきっとやり遂げてみせる！）」

講師は恐怖だったけど、当たり前に夢を持っている人たちと接していたことは、本当に楽しかった！

私も今までとは違う、**何か新しい自分になれるのかも！**

## ◆カラーコンサルタントまでの道

アパレルメーカーに勤めていても地味で自信がなかった私。
でも、パーソナルカラー診断で色の効果を知ることで、とことん似合わない服を着ていたことがわかり、身につけるもの全部を変えると自信を持てて、だんだんと毎日が楽しくなっていったんです。

そして、**〝この感動をたくさんの人に伝えられる私になる！〟**と初めて自分で決めた目標を持ったのでした。

先日診断して頂いた、カラーコンサルタントの先生のもとで１年講座を学び**〝パーソナルカラー診断を日本の文化にします〟**と宣言したり、スキルを得て見た目も心もどんどん変わって、先生から言われたことをするために会社を休んで、家族を犠牲にして、とにかく全て指示通りやっていたんです。すると、

**色先生**「私もいつまで働けるかわからないから、後継者を育てていきたいと思っているの。藤井さんの熱意なら、私の仕事を任せられるかもしれないわ」

**私**「私が先生の後継者だなんて、嬉しすぎです！！私、先生に一生ついていきます！！」

しかし、１年間のカラー講座の卒業目前で、その関係性に変化が訪れます。

その頃、弟子として先生の仕事のお手伝いをしていましたが、

ちょうど仕事の打ち合わせをしていた時に、私に一つの仕事の依頼メールが来たんです。

**吉田**【藤井さん、先日はありがとうございました。会社でカラーセミナーを企画していますが、お願いでいますか？】

**私**「先生。今、先日お会いした吉田さんからお仕事の依頼がきてます！」

**色先生**「あら？私のお客さんがどうして藤井さんに仕事の依頼をするの？」

**私**「あ、なんでですかね。先日名刺交換をしたからでしょうか。先生、一緒にやっていただけませんか？」

**色先輩**「え？藤井さん！あなた､先生を利用しようとしてるの？」

**私**「え？利用って一緒にやることがですか？
そんなわけないです。私では力不足ですし、吉田さんは私のことを先生の窓口だと思ってるんですよ？
先生、お願いしまーす！」

**色先生**「・・・いえ、やりません。」

**私**「え？どうしてですか？」

**色先生**「あなたはわかっていないようだけど、**あなたには常識がないから**ですよ。でもね、あなたにその仕事ができる

わけがないわ。やれるものならやってみなさい」

**私**　「先生～なんでそんなこと言うんですか？常識ってなんですか？私にはできません。先生に依頼してくださいって返信しますから。私は先生が大好きなだけで、ずっとそばにいたいので、そんなこと言わないでください！」

**色先生**「あなたは・・・女優なの？そんな言い方して」

**私**　「へへへ、女優って何ですか～？」

**色先生**「何を笑っているの。そういうところが常識がないと言っているんです。
好きなだけではビジネスにはなりません。」

**私**　「でも・・・」

**色先生**「あなたには本当に女性がビジネスをしていく上での常識がない。あなたにビジネスができるわけがない。」

**私**　「・・・（私が何をしたの？どうしてこんなことに？）」

こうして突然言い渡された弟子クビ。１年かけて学んできた講座の卒業をもって、協会からも切り離されることになりました。

**私**　「私は先生にどんな悪いことをしたの？」

大好きだった先生との楽しかった思い出がグルグル頭の中をか

けめぐり、先生からの拒絶と恐怖の言葉を思い出しては涙が止まらない。
その後、何度か日中に先生から【あなたは誤解しています。一度話しましょう】というメールや着信があったものの、恐怖の感情が溢れ仕事が手につかなくなり、トイレに駆け込んで泣くという繰り返し。
会社のトイレで泣いていると地面がグラグラして、パニックを起こしそうになっていました。

来る日も来る日も、泣き続け笑うことを忘れ１ヶ月たったある日。その日の夜も自宅で、ふと絶望を思い出し涙して、だんだんと声を上げて泣いていたら、私の膝に２歳と４歳の娘が寄ってきて、泣いている姿を見たんです。

**娘たち**「ママ〜泣かないで〜ママ〜あああああ〜」

**私**「あれ？なんであなたたちが泣いてるの？」

**娘たち**「ママ〜泣かないで〜あああ〜」

**私**「・・・(私の声は届いてない。パニックだ。もしかしたら、これまでずっとこの子達も泣いていたの？)」

私はひたすら自分の世界に閉じこもって１ヶ月泣き続けていましたが、この子達もまた、泣いている私を見て、１ヶ月泣き続けていたんです。

小さな二人が抱き合って、私を見ながら泣いていた。

私はそんな娘たちの様子に全く気がつかなかったんです。

娘たちには、私しかいないのに、私は自分の世界に閉じこもって、やっと見つけた夢が断たれた絶望の中、ただひたすら悲劇のヒロインになって一人で泣いていた。

この１ヶ月間、家事もろくに手につかなかったので部屋は散らかり放題、キッチンも汚れたお皿が山積み、そして隣で娘たちがワンワン泣いている。

**私　「なんだこれ、地獄絵図･･･私、泣いてる場合じゃなかった」**

今の惨状に気づき、ようやく現実に返ってきた私は、
泣き止み母として立ち上がったのです。

**私　「私はこの子達の母親だ。私、強くなる！」**



この子達に私の代わりはいないと気づいた時から、娘たちが可愛く見えてきたから驚いたなぁ。




自宅近くのカフェでカラーセミナーの開催にチャレンジ！組織に頼らず自分の力で稼ぐ事を考えはじめる。

## ◆売り方を学ぶネット起業セミナー

自分の世界から外に出た私は、次のことを考え始めます。
〝パーソナルカラーのスキルはついた。あとは実践のみ〟

そして出てきた問題が、**このパーソナルカラー診断をどうやって売るか？**ということ。カラーコンサルタントの先生からは、スキルは学んだけど、売り方は教わっていなかったんです。

**私**「むしろ先生も苦労していたのかもしれない。
だから自分のお客さんが私に取られたと思って、怒ったんだろう。取った取らないとか、利用するしないって、それが働く女の世界の常識なのかなぁ。やだなぁ・・・」

カラーコンサルタントになるのに、講座以外も含めて１００万円以上使ったけど、全く回収できていない。売り方がわからなくて困っていた時に私が辿りついたのが **SNS** でした。

会社で仕事をしながら、ひたすら SNS で **〝稼ぎ方教えます！〟** という人と連絡を取り、１ヶ月で１０人以上の人と話しました。

話をしていくうちにだんだんと、ビジネスの形はいろいろで、どんな形でもお金を稼ぐことが出来れば生きていける、などこれまでの会社員としての働き方がベースになっていた私の考え方が少しずつ変わってきたように思うんです。

その中でも、ひときわ輝いて見えたカリスマ性のある女性経営者の方とオンラインで話したときに、こう質問したんです。

**私**　「私のカラーコンサルの仕事ってオンラインで売れますか？売り方を教えてもらえますか？」

**ヒカリ**「アナタくらいやる気があったら絶対に売れるわ。いつから起業するの？まさか会社辞めて５年後なんて言わないわよね。今すぐやるわよ」

**私**　「は、はい！！ついていきます！！」

そして、そこから１年に渡るパーソナルカラーの商品を売るためのビジネスを学ぶ、コンサルが始まったんです。
これまで同様、言われたことは何でもやりました。
ターゲットは婚活女性がいいと言われたので、その人向けにバックエンドという高額商品を作ったり、小冊子を作るように言われるとパソコン初心者でしたが小冊子を作りました。

メールマガジンで情報を発信するように言われると、毎朝３時に起きて文章を書いて、７時に配信するスタイルで、とにかく毎日発信していきました。

しかし、言われたことをひたすら半年間、全部やったのに、何ひとつ売れない。

共に学ぶメンバーはどんどんバックエンドを売っているのに、私だけが何も売れない。
すると、だんだんとヒカリさんの雰囲気が変わってきたのです。

**ヒカリ**「なつこはさ、本当ここまでやってるのになんで何も売

れないの？」

**私**　「すみません・・・（でも売れる気がしないなんて
言えない。本当に私はこの商品売りたいのかなぁ）」

**ヒカリ**「本当なつこはバカなんだから。静かにしてなさいよ。」

**私**　「へへへ・・・（バカ？バカってどういう意味？）」

ネット起業セミナーで作った商品が売れる気がしない。
でも売らないと怒られて、怖いから笑ってゴマかすの繰り返し。
（どうしてお金払ってるのに逆ギレされて、私が怒られるの？）
そんな疑問も、もう主人にも友達にも会社の人にも相談できない。私が自分で決めて、自分でお金を払ったこと。
でもまだ、私だけが何にも始まってない。




はじめて書いた婚活女性に向けての小冊子
バナーは WEB デザイナー依頼で素敵



平日に有給使ってビジネス
学んで何も売れない。
「何やってるんだ私は…」
って思ってたなぁ。

この不安を一緒に学んでいる仲間に相談すると、コソコソ連絡とってるんじゃないって、ヒカリさんにまた怒られる。

**私**　「ヒカリさんを信じてついて行ってるのに、どうしていつもこんなに怒られるんだろう？」

この漠然とした不安とわずかな不信感が確信に変わったのが、ヒカリさんが主催する地方開催のセミナーに参加した時のこと。

ヒカリさん自身がコンサルを受けているという神木先生ご夫妻を招いて〝**夫婦で働く**〟というセミナーした際に、セミナーの内容に興味があった私は、東京から飛行機に乗り、会場の準備を手伝おうと早めに会場に伺ったんです。

そこで、ヒカリさんは神木先生に、私をこう紹介したんです。

**ヒカリ**「この子は何をやっても売れないポンコツのうるさい奴なんで、放っておいて大丈夫です〜」

**神木**　「ほう〜」

**私**　「・・・（あれ？そんな風に思ってたの？そんなのってある？笑い取ろうと思って、口悪すぎじゃない？あれ？誰も笑ってないけど・・・）」

そして、そのセミナーの夜の懇親会で、ヒカリさんの言葉が気になって、だんだんと苛立ってきた私は、ひたすら酔っ払い、講師の神木先生を私の前の席に呼び、これでもかというくらい

絡んでいったんです。

**私**　「先生！ヒカリさんに私のこと、バカって紹介されてましたけど、私バカじゃないですから！」

**神木**　「ん？そうかぁ。なつこ、がんばれ〜！」

**私**　「だから私はバカじゃないんです。私のどこがバカなんですか？」

**神木**　「ん？そうかぁ。なつこ、がんばれ〜」

**私**　「ムキーー！！だからどこがバカなんですか？」

・・・の繰り返し。

大人になってバカって人に言う人たちって、どういう神経しているの？失礼でしょ！だいたい、バカってどういう意味よ？

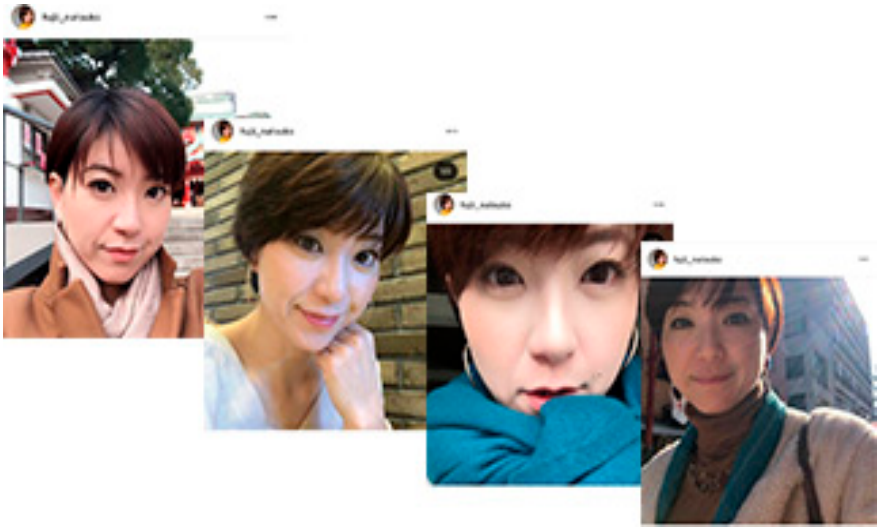
新しい事を学びたい。新しい自分になりたい。ここではないどこかに行きたい。
でもそれが叶わず、どこにいてもぬぐえない、まとわりついてくる認めてもらえない虚しさ。

セミナーが終わって東京に返ってきて、仕事に戻っても、
〝ここではないどこかへ〟という、自分の中に芽生える新たな感情が抑えられなくなっていきました。
そして、そんな時に主人からこんな提案があったんです。

**主人**　**「富山に来て、僕のことを支えてくれないか？」**

どこに行っても私は誰にも必要とされてない。
どうせバカだし、誰の期待にも応えられない。
そんな時にかけられた主人のサポート
という役割と移住の話。

**私「いいですとも！**
**東京になんて未練はない！**
**わたし、富山に行くわ！！」**



富山に行くと決めてからは
失うものは何もない！と思い、勧められるまま始めた Instagram
富山で何か仕事につながったらいいなと思い、自撮り投稿の日々。